2026 年 1 月

主の公現

～ 日常の中に立ち現れる希望 ～

主任司祭　野田安則

「主の公現」（エピファニア、Epiphania）の祭日は、イエスの誕生と、その活動の最初の出来事を記念し、救い主のうちに神の栄光が公に現わされたことを祝います。ここで重要なのは「公」という点です。神の現れは、内輪の体験や一部の信仰者だけに閉じられたものではなく、東方の博士たち（外部の者、異邦人）を通して、世界に向かって開かれました。私たちも博士たちのように「ひれ伏して幼子を拝む」とき、出来事は過去の物語にとどまらず、今の私たちの現実に触れてきます。そのとき、何気ない日常や、辛いことばかりに思える毎日が、かけがえのない意味を帯びて立ち現れてくる―この「現れ」はエピファニアの一面です。それを可能にするのは神です。

「エピファニア」という語は、ギリシア語の epi（～の上に）と phainein（現れる）に由来します。「パンデミック」という言葉も同じ語源です。epi-demic（民の上に起こる出来事）、そして pan-demic（すべての人に及ぶ出来事）。パンデミックは、私たちの日常の上に否応なく起こり、世界の脆さや不安を露わにしました。しかし同じく「上に起こる」出来事であっても、エピファニアは現実を破壊するのではなく、同じ現実の中に希望の深みがあることを顕わにします。公現は、その暗さの中でも光が失われていないことを示します。

前教皇ベネディクト 16 世は、回勅『希望による救い』の中で、キリスト教の希望を、単なる楽観主義や将来への期待ではなく、「今を生き抜く力」として語りました。希望とは、苦しみや不安が消えることではなく、そのただ中でも「意味は失われていない」と知ることです。主の公現とは、まさにそのような希望が、この世界にすでに置かれていることを示す出来事です。

受肉の神秘は、過越しの神秘を通して、私たちの日常にまで及んできます。この希望の中で、私たちは「今ここにおられる神」、すなわちパルーシア（parousia）に信頼をもって心を向けることができます。パルーシアは遠い将来の完成を待つ言葉であると同時に、すでに始まっている神の臨在です。日常生活の中に浮かび上がる「エピファニア」に気づくとき、私たちは、たとえ混沌の中にあったとしても、孤独や無意味に閉じ込められることなく、「希望によって救われつつある者」として、今日を生きる力を新たにされます。主の公現は、見えなくなっていた希望を回復し、静かに、しかし確かに、私たちの歩みを支え、励ましてくださる神の働きです。

2026 年 2 月

おつげの祈り（アンジェラス）

～ 声を合わせ、心を合わせて、時を神にささげる ～

主任司祭　野田安則

富士見教会では、ミサの前に「お告げの祈り」を唱えるようになりました。準備や聖歌の練習などがあり、ミサの前は、気持ちが落ち着かないまま過ぎてしまうことが少なくありません。そうした慌ただしさを整え、神の前に静かに立つための時間として、ミサの前に祈りを通して心を整えることを大切にしていきたいと思っています。

お告げの祈りは、「アンジェラスの祈り」とも呼ばれます。ラテン語で Angelus Domini nuntiavit Mariae（主の天使がマリアに告げた）という、この祈りの最初の言葉から名づけられています（ラテン語典礼文に広く見られる incipit による命名法の一例です）。この祈りは、アヴェ・マリアの祈りを三回含み、天使のお告げによって神の子が人となられた出来事、つまり受肉の神秘を黙想する祈りです。

Jean-François Millet の《晩鐘（The Angelus）》は、夕暮れの畑で、農夫と農婦が作業の手を止め、遠くの教会から響くアンジェラスの鐘に耳を傾ける姿を描いています。その鐘に合わせて唱えられていたのが、お告げの祈りです。この作品は、祈りが日常の労働の流れの中に自然に息づき、生活そのものを整える営みであったことを、静かに伝えています。

アンジェラスの鐘は、お告げの祈りを唱える時を知らせるために鳴らされる教会の鐘です。朝、昼、夕と一日に三度鳴らされ、忙しい日常の中で祈りの時があることを思い起こさせてくれます。その音は、ただ時刻を告げるものではなく、日々の営みの中で立ち止まり、神が人となられた出来事を心に留めるよう、静かに招いています。アンジェラスの鐘は、生活の流れの中に救いの記憶を刻み、時間を神にささげるよう促す鐘とも言えるでしょう。

このように、アンジェラスの祈りは、日常の時間を神に向けて整える祈りとして、長く人々の生活の中で大切にされてきました。そしてこの祈りは、個人がそれぞれに唱える祈りであると同時に、教会に集う共同体がともに唱える祈りとしても受け継がれてきました。

先唱が唱える祈りに耳を傾け、祈りの最後に、「わたしたちも同意します。そのように祈ります」という意味を込めて、「アーメン」と会衆全体で唱和します。先唱の呼びかけに会衆が応答し、最後に一つの声で「アーメン」を唱えるとき、祈りは個人の祈りを超えて、共同体の祈りとなります。一人ひとりが心を込めて唱える祈りが大切であるのと同じように、定められた箇所で心と声をそろえて唱える祈りも、教会の大切な祈りのかたちです。祈りは、共同体が一つに結ばれ、成熟していく姿を静かに映し出します。

祈りのかたちは、信仰のかたち
lex orandi, lex credendi

2026 年 3 月

灰の水曜日

～ 土から造られ、神の息に生きる私たち ～

主任司祭　野田安則

四旬節は灰の水曜日から始まります。この日、私たちは額に灰を受け、「あなたは塵であり、塵に帰って行くのです」（創世記 3:19 参照）という言葉を聞きます（または「回心して福音を信じなさい」（マルコ 1:15 参照））。この言葉は、私たちを原点へと立ち返らせます。私たちは土から造られ、神の息を受けた存在であるということです。

創世記は、人が「土の塵」から形づくられたと語ります（創世記 2:7 参照）。人間は自分で自分を生み出したのではなく、大地に属する存在です。もろく、限界を持ち、やがて塵に帰る存在です。謙遜とは、まずこの事実を受け入れることです。

謙遜、英語では humility。この言葉はラテン語 humilitas に由来し、その語源は humilis（低い、地に近い）、さらに humus（土・地面）にさかのぼります。謙遜とは「地に近いこと」、つまり自分が土に属する存在であることを忘れない姿勢です。旧約聖書でも、ヘブライ語で「人」はアダム、「大地」はアダーマーといい（創世記 2:7 参照）、語呂合わせになっています。人間が大地と切り離せない存在であることを示しています。

神はその鼻に命の息を吹き入れられました（創世記 2:7 参照）。人は土から造られた存在であると同時に、神の息によって生かされる存在です。さらに、人は神の似姿として造られました（創世記 1:26-28 参照）。土に属しながら、神に向かって生きる存在。それが人間です。

灰の水曜日に授けられる灰は、十字の形で額に記されます。塵である私たちは、同時に、十字架の愛によって救われた存在です。十字架は、人間の最も低いところに神が降りて来られたしるしです。塵に帰るはずの存在を、神は御子の十字架によって新しいいのちへと招かれました。私たちは土に属する者でありながら、十字架の愛に包まれているのです。

謙遜とは自己否定ではありません。「自分は価値がない」と思うことでも、「自分は特別だ」と誇ることでもありません。自分が土であること、そして十字架の愛によって生かされていること、その両方を同時に忘れないことです。

灰の水曜日は、自分を低くする日であると同時に、本来の位置に立ち戻る日です。地に属し、神の息に生かされ、十字架の愛に支えられている存在として、静かに原点へと帰る日です。

2026 年 4 月

復活のいのちが働くとき
～ 正常化のプロセスを歩む子どもたち～

主任司祭　野田安則

こどもたちが「お仕事」に向かうときの様子を見ていると、不思議な静けさに出会うことがあります。誰かに言われたからでもなく、他人からの評価を気にしているわけでもなく、ただ自分の内側から引き寄せられるように、一つの活動に集中していきます。まだ完全ではない、まだ出来上がっていない、それでも今ここでこれをしなければならない、というような内側からの動き、何かに向かっている真剣さがあります。モンテッソーリは、このように子どもが内側から整えられ、本来の落ち着きや秩序に向かっていく姿を、「正常化」と呼びました。

イエスは山上の説教の中で、「義に飢え渇く人は幸いである」と語りました（マタイ福音書 5:6 参照）。ここでいう義とは、何かを正しく行う力というよりも、神が望んでおられる世界のあり方、秩序や関係のことです。そして「飢え渇く」とは、足りないことへの不安ではなく、本当に必要なものに向かって心が開かれている状態です。「義に飢え渇く人は幸いである」とは、すでに満たされている人のことではなく、まだ満たされていないからこそ、真に求めるものに向かって生きている人のことです。そのような人は、すでに神の国に触れている、とイエスは語ります。

この「まだ満たされていないまま生きる」姿は、復活へと向かう歩みとも深く結びつきます。イエスの復活は、すべてが解決された状態をただ示す出来事ではありません。むしろ、大切な方を失った悲しみ、自分たちの願いが打ち砕かれ、先が見えなくなってしまうような現実を通りながら、それでも命が終わらなかったこと、神のいのちがその先に開かれていることを示す出来事です。弟子たちもまた、復活の主に出会いながら、すぐにすべてを理解したわけではありませんでした。恐れや戸惑いの中にありながら、それでも新しいいのちに招かれていきました。そこには、完成ではなく、なお歩み続けるいのちがあります。

子どもたちの集中する姿を見るとき、私たちはその向こう側に、不思議な大きな力が働いているように感じます。完成しているから幸いなのではなく、求めるべきものに向かって生きていること、そのこと自体が、すでに神の祝福の中にあるということです。私たちもまた、日々の生活の中で、何かに飢え渇きながら歩んでいます。未完成のまま、なお求めながら生きるその歩みの中に、復活のいのちは働いています。

注　本稿は、すわせいぼ幼稚園『ひかりの子』(2026 年 4 月・5 月号)の巻頭言を転載したものです。

2026 年 5 月

日常の神学

～ 派遣された者として、今ここを誠実に生きる ～

主任司祭　野田 安則

教皇ヨハネ 23 世は、自伝的な著書『魂の日記』の中で、age quod agis という言葉を記しています（注1）。これはラテン語で、直訳すれば「あなたがしていることをしなさい」という意味です。過去への後悔や未来への不安に心を奪われすぎることなく、今、自分に与えられている務めを、逃げずに、散らされずに、心を込めて果たすことです。

このことは、「派遣された者」として日常を生きる姿と深く結びつきます。ミサの終わりに、私たちは教会からそれぞれの生活の場へと送り出されます。みことばを聞き、キリストのいのちに養われた者は、そこで終わるのではありません。家庭へ、職場へ、学校へ、地域へと遣わされていきます。

「遣わされる」とは、必ずしも場所を移ることではありません。今いる場所を、神から託された場所として受け取り直すことです。家庭に、職場に、教会に、幼稚園に、病の床に、また困難な人間関係の中に、私たちは遣わされています。動くことができない場所、簡単には変えられない現実の中に留まりながら、そこを福音を生きる場として受けとめることも、派遣です。

私たちは、自分で選んだわけではない現実の中に置かれることがあります。望んで引き受けたわけではない責任を担うこともあります。九鬼周造が「運命」について考えたように、人間は、与えられた現実をただ受け身で耐えるだけではなく、それにどう向き合うかによって、自分自身を形づくっていきます（注 2）。置かれた所を、「閉じ込められている場所」としてではなく、「遣わされている場所」として見つめ直すとき、同じ現実の中に、新しい意味が見えてきます。

置かれた所に留まることは、閉じこもることではありません。自分だけを守るためではなく、そこにいる人々のために、神の光が届くために留まるのです。弱さや迷いを抱えながらも、今日、目の前の人に向き合う。与えられた務めを誠実に果たす。小さな言葉、小さな沈黙、小さな忍耐の中で、神の愛に応えていく。日常の中で、私たちは神からの呼びかけに応えていきます。

これを私は「日常の神学」と呼びたいと思います。今日という一日は、単なる繰り返しではありません。神から与えられた、一回限りの時です。そして私たちは、その「時」の中へ派遣されています。age quod agis。今、ここを誠実に生きる。それが、神から遣わされた者の生き方ではないでしょうか。

注 1　教皇ヨハネ 23 世『魂の日記』ドン・ボスコ社　2001 年。
注 2　九鬼周造『人間と実存』岩波文庫　2016 年。

2026 年 6 月

輝く青葉に恵みを感じて
～ 今、この時を大切に ～

主任司祭　野田 安則

先日、長野県と山梨県の司祭の集まりが軽井沢で開催されました。青葉、若葉の美しい季節で、光を受けて輝く木々の緑を目にしていると、カトリック聖歌の「青葉、若葉に風かおりて」という歌詞が自然と思い出されました（352 番、あおばわかばに）。

その集まりのミサの説教で、司教様が「クロノス」と「カイロス」という二つの「時」について話してくださいました（いずれもギリシア語）。クロノスとは、時計で測ることのできる時間。朝から昼へ、昼から夕方へ、昨日から今日へと流れていく時間です。一方、カイロスとは、神さまの恵みを感じる時、その時が特別な意味をもって心に受けとめられる時です。

軽井沢で見た青葉も、季節の移り変わりとして見れば、クロノスの中の出来事ですが、若葉を渡る風に心を動かされ、「神さまのいのちが、今ここにも働いている」と感じたその時は、恵みの時、カイロスであったと言えます。

子どもたちの成長にも、同じような恵みの時があるように思います。幼稚園での日々は、登園し、あいさつをし、身支度をし、遊び、お仕事をし、友だちと関わり、また家へ帰っていく、毎日の繰り返しのように見えることがあります。しかし、その中で、子どもが初めて自分で靴をそろえられた時、友だちにやさしいことばをかけた時、できなかったことにもう一度取り組んだ時、泣いていた子が少し安心した表情を見せた時。そのような時は、ただ流れていく時間ではなくなります。そこには、子どもの成長があり、心の動きがあり、神さまからいただいたいのちの輝きがあります。

教皇ヨハネ二十三世は、ラテン語で *age quod agis*（アジェ・クオッド・アジス）という言葉を大切にしていました。直訳すれば、「あなたが今していることをしなさい」という意味です。これは、ただ目の前のことを片づけるということではありません。今、自分に与えられているこの時を、心を込めて、誠実に生きるということです。

私たちは、今いる場所で大切な務めをいただいています。家庭で、幼稚園で、子どもたちと過ごす日々の中で、私たちはそれぞれの「時」の中に置かれています。その時を、ただ過ぎ去るものとしてではなく、神さまから与えられた時として受けとめるとき、日常の時間は恵みの時となっていきます。

若葉を渡る風のように、神さまの働きは、いつも目に見えるとは限りません。しかし、子どもたちの中には、確かに成長の力が働いています。その力を信じ、見守り、必要な時に手を差し伸べながら、今この時を大切に歩んでいきたいと思います。

注：本稿は、すわせいぼ幼稚園『ひかりの子』（2026 年 6・7 月号）の巻頭言を転載したものです。

2026 年 7 月

絶えざる御助けの聖母の聖画

～ 母はこれらのことをことごとく心に留めていた（ルカ 2:51b） ～

主任司祭　野田安則

1865 年、レデンプトール会は教皇ピオ 9 世から、絶えざる御助けの聖母の聖画を通して聖母マリアを世界に知らせるよう託されました。この聖母画はイコンと呼ばれる聖画像の一つです。

イコンは、「肖像」、「似姿」を意味するギリシア語「エイコーン」に由来することばで、ギリシア正教会で礼拝に広く用いられています。キリスト、聖母の像が、人の手で描かれたものとしてではなく、聖なる原像の顕示とみなされます。

マリアであっても、神の計画をすべて理解できたわけではありませんでした。マリアはすべてを心に納め、思いめぐらし、神の思いを学び、身につけていきました。マリアは、さまざまな体験を神の計画として思いめぐらすことにより、母親としてイエスを愛する者から、人間の思いを超えた神の思いを受けとめて、十字架の愛でイエスを愛する者へと変えられていきました。

「この聖画は、イエスが幼いときから将来の運命を知り、それについて考えていたこと、そしてマリアもそれを知り、心の中で堪え忍んでいたことを表しています。聖母はすべての人々を愛し、ご自分の子の受難がなければ救いが実現できないことを理解していたので、あえてこの苦しみを受け入れられました。だからこそ彼女の慈しみ深いまなざしはこの世の子供たち全員に注がれ、神の母、人類の母、贖いの協力者、すべての聖寵の仲介者として、ご自身を示しておられるのです。『絶えざる御助けの聖母』という名称は、これらのすべての称号を余すところなく要約しています」（注）。

注 :レデンプトール会のホームページ http://www.cssr.or.jp/

本稿は『お知らせ』（2023 年 7 月号）巻頭言の再掲です。

2026 年 8 月

魔法のことば

～ 水のこころも、人のこころも ～

主任司祭　野田 安則

私が担当している幼稚園では、夏になると、「水のこころ」を歌います。人に対してやさしい心をもてるようにと願いながら、この歌を歌ってもらっています。

人にやさしくするためにはことばの使い方が重要です。例えば、「いいですか」、「ありがとう」、「ごめんなさい」。これらは魔法のことばです。この一言で雰囲気ががらっと変わります。

自分勝手に振る舞わないために「いいですか」と言い、自分中心にならないために「ありがとう」、自分の間違いや弱さを認めて「ごめんなさい」と言います。私は結婚講座で、この魔法のことばを使うことを忘れないよう二人に話すことにしています。「使うべき場面で発するふさわしことばは、日ごとに愛を守り養います」（教皇フランシスコ『使徒的書簡 愛のよろこび』2017 年 カトリック中央協議会 133）。

私たち人間はすべて神の命をいただいて生きています。だから一人ひとりが尊く、神の目には愛おしい存在なのです。感謝の気持ちを忘れず、弱さを認め、互いに支え合いながら、神の恵みの中で、頂いた命を豊かに生きていくことを神様は望んでおられます。魔法のことばはこのことを忘れないためのことばです。

♪水のこころ（作詞：高田敏子、作曲：塩田泉神父）

水は つかめません　水は すくうのです
指を ぴったり つけて　そっと 大切に
水は つかめません　水は つつむのです
二つの手の中に そっと 大切に
水のこころも 人のこころも

2026 年 9 月

聖アウグスティヌス
～ 問いを抱えて生きる ～

主任司祭　野田安則

8 月 28 日（年間第 21 金曜日）、教会は聖アウグスティヌスを記念しました。

『告白』の冒頭で、彼は「私たちの心は、あなたのうちに憩うまで安らぎません」と祈っています。アウグスティヌスは、長い間、真理を求め、迷い、問いながら生きた人でした。すべての答えを得てから神を信じたのではありません。むしろ、分からないことを抱えながら、それでも神を求め続けました。

当日の福音は、賢いおとめと愚かなおとめのたとえでした（マタイ 25:1-13）。 これは聖アウグスティヌスのために選ばれた箇所ではなく、年間第 21 週金曜日の朗読です。それなのに、アウグスティヌスの生涯と不思議なほど響き合っていることに驚きました。

賢いおとめとは、すべてを分かっていた人ではありません。花婿がいつ来るか分からないまま、それでも油を絶やさず待ち続けた人です。その油とは、答えが見えなくても、主は来られると信じて待ち続ける信頼、と言えるかもしれません。

この姿は、聖書に登場するほかの人々にも重なります。アブラハムは「行き先を知らないで」出発しました（ヘブライ 11:8）。聖母マリアも、理解できない出来事をすぐに答えにしてしまうのではなく、「心に納めて、思いめぐらして」いました（ルカ 2:19、51）。

信仰とは、すべてが分かってから歩き始めることではありません。分からないことを抱えながら、それでも神とともに生き続けることです。問いを抱えたまま、今日を生きることです。意味が分からない、その日常にも、神はともにいてくださいます。

2026 年 10 月

ロザリオの月に想うこと(※)

～ 幸せは 一日一日の歩みの中に ～

主任司祭　野田安則

聖母マリアの生涯について、聖書に記されているのは、受胎告知やイエスの誕生、十字架のもとに立つ姿など、限られた出来事です。その間には、ナザレでの長い日常、家族とともに暮らし、働き、食事を整え、祈りながら過ごした、何でもない一日一日の積み重ねがあったはずです。

私たちの日々の生活も、同じようなことの繰り返しで成り立っています。朝起きて、食事をし、仕事をし、人と出会い、一日を終える。子どもたちも、園に来て身支度を整え、お仕事やさまざまな活動に取り組み、食事をともにし、友だちと関わりながら、一日一日を重ねていきます。

私たちは、ともすると、大きな出来事や目に見える成果に心を向けがちです。子どもの成長についても、「何ができるようになったか」「どれだけ先へ進んだか」に目が向きます。しかし、子どもたちは、将来のためだけに今日を生きているわけではありません。今日、夢中になって遊ぶこと。今日、同じことを何度も繰り返すこと。今日、友だちと笑ったり、時にはぶつかったりすること。今日、心を動かし、感じ、考えること。その一つ一つが、その子のかけがえのない人生です。

ベトナムの禅僧ティク・ナット・ハンに、次のような言葉があります(注)。There is no way to happiness. Happiness is the way.(幸せに至る道があるのではない。歩んでいるその道そのものが幸せなのだ。)幸せを、いつかたどり着く場所に求めるのではなく、今歩いている一歩一歩の中に見いだしていく。幸せは将来の到達点ではなく、今この瞬間をどう生きるか、その歩みの中にある。この言葉は、子どもたちの成長を見守るときにも、大切なことを教えてくれるように思います。成長したその先にだけ大切なものがあるのではありません。育っていく、その毎日の歩みそのものが大切なのです。

ロザリオの祈りが、一つ一つの「アヴェ・マリアの祈り」を重ねるように、私たちもまた、一日一日を重ねながら生きています。目立たない一日、何も特別なことがなかったように思える一日にも、子どもたちは確かに育っています。

※ 本稿は、すわせいぼ幼稚園『ひかりの子』(2026 年10・11 月号)の巻頭言を一部修正の上転載したものです。

注 NHK「宗教の時間」『AI 時代に学ぶ禅―本来の自己を生きるために』第 4 回(講師・藤田一照、2026 年 1 月放送)および同名テキスト(NHK 出版、2025 年)。